

# 私の柔道

関 巖

法学部 法学科

昭和49年4月、7年間在籍しました東海大学から名城大学に奉職の場を移し、体育教師として、学生の健全なる心身の育成を第一の教育理念とすると共に、柔道部の指導に夢と情熱を持って赴任させて頂きました。

着任時、すでに部は活動しており、長い歴史もあり、OB諸氏は社会的にかなり活躍されており新米の私がどこまで入り込む事が出来るかと、一抹の不安もありましたが、私の指導方針にご理解とご協力を頂き、部員も若き私に賛同し、名城大学での柔道人生がスタートしました。(スタート当時の部員は50才を過ぎ、OBとして今の柔道部を支援してくれております。)

部を率いる者にとって、又その者の元で汗を流す部員たちにとって、全国大会出場はお互いが自らに課せる課題であり、一つのスポーツを飽きることをなく続ける者にとっての夢です。同じ夢に向かって第一歩を踏み出しました。

その夢を実現するには当時の三強(中京大学、愛知学院大学、名古屋商科大学)の一角を崩さねばなりません。第一関門はこの一角を崩すことでした。

それまでの柔道部は、部の強化ということは全くされておられませんでしたので、大学のご理解のもと、3年計画で強化のスタートをきり、先ず選手勧誘に走りました。

授業の合間をぬって、インターハイ、国体、金鷺

旗大会(全国より男、女合わせ約500校前後参加する福岡での試合で、関係者が注目する大会)に出向いたり、先輩、後輩、教え子の情報を聞いたりして各地を廻り、名城大学柔道部の実情を話し、全国大会出場経験者、又は県大会上位入賞者を集めました。

幸いに高校教師をしている同級生や教え子が全国におりましたこともあり、まだ名の知られていない名城大学柔道部ではありましたが、6名の部員が入学入部してきました。この6名はそれぞれの個性を持ち、あわや1年目にして全国大会出場かと思わせる試合をし、東海4県の地区予選に名城大の名を知らしめることになりました。この6名との出会いは、私の思い出に残る1ページとなり、彼等は今、警察、消防、そして接骨院など職種はいろいろですが活躍をしてくれております。

計画通り、いや1年早くして全国大会出場を準優勝という好成绩で果たすことが出来ました。それは昭和53年第25回東海学生柔道優勝大会であり、その試合の様子は今でも鮮明に脳裏に焼きついております。名城大のプラカードを誇らしげに持って、日本武道館を行進する部員は感無量であり、それを見守る私の胸中は計り知れない喜びで一杯でした。

以降毎年全国大会に出場する力はつき、選手勧誘も順調に進み、入部希望者も年々増えてきました時、入試が難しくなり、現状を維持することが精一杯となり、他大学と比べて選手層が薄くなり、東海地区

優勝を目指しておりましたが、一步手前で11年間の歳月が流れました。

17～18年前、法学部にスポーツ推薦入試制度が導入され、柔道部に3名の枠が出来たことが今日の基盤となり、更なる上を目指し第二段階に入っていました。

平成元年、第37回東海学生柔道夏季優勝大会、決勝の相手は名門中京大学、4年生3名、3年生1名、2年生2名、1年生4名で臨み、近代福山高出身4年生宇津の捨て身の小内刈が見事に決まり、悲願の初優勝を手にし、その足でサッポロ浩養園に繰り出し、OB、その他関係者、そして主役の部員との祝杯は、私の柔道人生で忘れられない日となりました。

全国大会出場が常連になると次に目指すのはとにかく全国大会で一回戦を勝ち上がることです。地方大学が一回戦を勝ち抜くことは至難の業であり、関東、関西圏の壁は厚く、すべての点（選手層、環境）に差があることは歴然としておりました。強い大学や全国大会に出場してくるような大学は、合宿所ないし寮を持ち部員を一つに集めて指導することでチームワークを高め、部員の健康管理に務め、密度の濃い指導がなされております。私が以前在籍しておりました東海大学もその例にもれず、私もチームを率いる時には部員を一ヶ所に集めなければと常々思っておりました。

私が目指す大学での部活動とは、「文武両立」であり、「円満な人格形成」にあります。部員の数も増え、部も強くなってきましたが、各自が下宿をしておりましたので、思うように統括が出来ず、食生活にも問題があり、学業の方も思うようにはかどりません。部員をかかえて問題点は一杯ありました。

夢の実現の為、平成4年4月、「柔道・新瑞寮」をスタートさせました。家族の理解と協力のもと、私的に寮を建てました。24時間365日、部員と共に過ごすことになりました。この時6名が入部、入寮してきました。中でも4名は高校時代の成績も良く、今

でも語り継がれている四天王です。2～4年生も充実、各階級にそれぞれ力を持った部員が揃い、この年、東海学生柔道夏季優勝大会、新人戦、東海学生柔道冬季優勝大会と三冠を達成し、冬季大会15連覇の幕が切っておとされました。

その力は全国大会においても発揮され、地方大学としてベスト16という偉業を成し遂げ、新聞紙上を飾りました。2回目のベスト16の試合でした。私は肘の手術で入院中、そこに福井監督より一報が入り、その声は震えていました。当時かなり力を持っていた中央大学を破ったとのこと、私は何度も聞き返し耳を疑ったくらいです。その場に居合わせる事が出来なかったことが、今でも一番残念であり、嬉しい事でもありました。

平成9年まわりからの要望もあり、女子部を立ち上げ、2名からのスタートが始まりました。その翌年5名となり中京大女子を相手に善戦し、全国大会の切符を手にしました。その翌年、平成11年第6回大会3人制で全国3位となり、その後5回3位に入賞し、名城大女子強しを全国にアピールしております。

「柔道・新瑞寮」を紹介したいと思います。24名からスタートした部員は現在53名（男子43名、女子10名）です。部員はすべて寮生活をしております。朝起床は6時、瑞穂グラウンドでの朝トレ（6時20分～7時15分）、放課後の道場での練習、そして各自の自覚のもとでの筋力トレ、そして学業です。寮制にしたもう一つの目的は食事にあります。スポーツ選手は朝ごはんを食べなければ芯から強くなれません。朝ごはんに重きをおき、バランスのとれた食事を摂らせております。夕ごはんは授業の終了が各自異なるのでチェックが難しい部分もありますが、不足しがちなビタミンやカルシウム、鉄分などをメニューに盛り込み、一人暮らしでは味わえないおふくろの味を必ず1～2品とり入れ、健康管理に務めております。柔道は無差別の団体戦以外は男女共に7階級

制の試合であり、軽量級はウェイトコントロールが大変です。試合の前になると水も重さになり、寮内に悲壮感が漂いますが、低カロリーでありながらも、力になるものを食べさせております。そして、こうした生活でしか学べない、人を思いやる心、感謝する心を養っております。

寮を巣立った者の前触れもない訪問は、この上ない喜びです。その時は感じなかった寮のありがたみや、その時部員だけにしか伝わっていなかったエピソードや、これからの人生など夜を徹して語り合える時間も私の宝であります。そこで必ず彼らがする行為は鍋のフタを開けたり、その日のおかずに出したりすることです。何とも言えない仕草ですが、これ又嬉しい事です。これが寮なのです。「喜怒哀楽」の生活は、体験した者にしかわからない至福の空気です。

昭和49年からスタートした私の名城大学での柔道部は、皆様のおかげで着実に成長し、地方大学として一目置かれるようになりました。去年の全日本学生柔道体重別団体優勝大会では、関西3位の龍谷大を破りベスト16に入り、ベスト8に入る相手は優勝した国士館、6-1ではありましたが国士館を相手に東海に名城ありを強烈に印象付ける思い出に残る試合となりました。そしてこの平成19年度10月13日、14日には男子10名（4年2名、3年2名、2年1名、1年5名）女子5名（4年1名、3年4名）が全日本学生柔道体重別選手権大会（日本武道館）に出場し、全国の舞台で7名が一回戦を突破し、全員が内容ある戦いをして参りました。

ここで、今までの主なる試合成績を記します。

- 東海学生柔道夏季優勝大会、優勝12回
- 東海学生柔道冬季優勝大会、16回優勝15年連覇中
- 全日本学生柔道優勝大会、ベスト16、3回
- 全日本学生女子柔道優勝大会、3位入賞6回
- 全日本学生柔道体重別団体優勝大会、ベスト16、

2回

- 全日本学生柔道体重別選手権大会、多数出場さす
- 全日本柔道ジュニア体重別選手権大会、個人3位
- 講道館杯全日本女子柔道体重別選手権大会、多数出場さす

東海の雄に甘んじることなく、文武両立のもと全国大会男子ベスト8、女子3人制優勝を目標に、コーチ、部員と一丸となり精進してまいります。

私の人生は教師冥利につきます。